

# こころやうき

## 壽量の巻

信仰の大意……………	一	時代の然明……………	一九
至心に念佛す……………	三	生命……………	二四
念佛三昧……………	四	後編	
親の目的……………	七	發願の果……………	三四
光明生活に入る階位……………	八	四誓の偈……………	三六
信……………	一〇	壽量品……………	三八
波羅密……………	一四	法華經……………	四四
清浄光……………	一七		
天然を超えて……………	一七		

## 信仰の大意

(註 振假名は原文のまゝ、大正四年四月發行禮拝儀卷末附録)

竊かに宗教の宗教を案ずるに、宗教は天人合一または大小二我の調和にありと。由之見れば、如來の本體は物心不二の、毘盧舍那、宇宙の大靈にて、即ち絶対の大我なり。一切衆生は其の分子にて、即ち小我なり。然れば如來大我と衆生小我との親密に合一する所に信仰は成り立つものとす。

我が佛祖釋尊は本久遠實成の無量壽佛に在ませど、迹を地上に垂れ給ひ、生を淨飯の王家に受け、迅に無上の道意を發し山に入つて道を修すること六年、終に菩提樹下に於て金剛座上に座し無明永夜の眠醒めて正覺の光明徧く十方を照し、頓に生死を超えて金剛座上に座し無明永夜の眠醒めて正覺の光明徧く十方を照し、頓に生死を超えて永恒の眠醒めて正覺の光明徧く十方を照し、頓に生死を超えて永恒不滅の涅槃を證り給ふ。正覺とは即ち本覺の無量光と合一したる相にて涅槃とは即ち常住の無量壽に歸一したる義に外ならず。然れば佛祖佛陀の教旨は衆生をして無明の眠より醒

まし正覺の光と爲し、生死を離れて涅槃の常樂を得せしむにあり。若し之を宗教的に象徴せば、本覺無量光如來の光明徧く十方世界を照し、信念の衆生を攝取め給ひ、衆生至心に歸命て如來の光明と合ふ時は、如來正覺の光明が即ち我心光と成りうれば、知らず諸佛の正覺と等うし、又凡夫の小生命を大我の無量壽に投歸する時は自ら諸佛の涅槃と同一に歸す。爰に於て衆生無明の間は如來の覺光に照され、凡夫生死の苦は佛陀の常樂に化せらる。

吾曹が信仰の宗教とする所は、如來の光明を獲得し、罪惡の我が死し聖き我に更生り、光明の生活に入つて、聖旨を現す行爲をなすにあり。本如來は一切衆生の大ミオヤにて我らは悉く子なり。然れば吾らは如來に受けたる佛性と衆生性の煩惱とを具有す。衆生煩惱我が跋扈して罪惡を恣にす。故に道を求むるには自己の罪惡深重なるを自覺し、一心に如來の心光を仰ぎ、光明の名を稱へて、つねに憶念して止まず。然る時は信念内に煥發し大なる恩寵に攝護せられ、如來心光我に入り我如來に同化せられ、罪惡の我は清き靈心に更生り、如來を離れて我なく、我は是れ如來の子なりと覺る。ミオヤを離れて子の成長することは不可能なれば痛寐に如來を憶念し、我生命は全く無量壽に歸一したるものなれば現在を通して永遠にまで共にし、如來の命令に行爲ひ、私のはからひを捨て、一切は大ミオヤに一任して生活すべきものなり。

## 至心に念佛す

(振假名も印刷原詞のまゝ)

註—大正四年四月十六日發行の如來光明會禮拜式に於ては「至心に讀誦す」の次に「光明遍照」文の代りに(光明遍照文は無く此の文あり。  
數回改訂ありし禮拜儀の變更し來りし各全文は順序正しく追つて發表の豫定)

至心に如來を念じて心一境に注む。我如來心光に入り如來心光我を攝む。如來心光の外に我なく、我如來心と合一す。聖法然の阿彌陀佛と心を西に空蟬のめけ果たる聲ぞ涼しき 道の詠に倣ひて念佛三昧を修すべし。佛我無二の妙境に入て靈感極り

なきを得ん。之を念佛三昧又靈光三昧と云ふ。

## 念佛三昧

宗教は自己のみにては成立せぬ。即ち主體と客體との關係、人の信仰と如來の恩寵の關係にて、吾々子供は如來の大慈悲なる親の恩寵の育ては依らざれば成佛は出來ぬのである。

人は小天地である。小天地の中に我と云ふ精神、自我の我があるから生きて居ります。併し宗教ではさう云ひませぬ。小さき我と云ふものは大なる我に對して小我と云ひ、宇宙全體の絶對無限の大なる我を佛教では「ピルシヤナ」と申して、其絶對なる大なる宇宙を指して丁度小天地に我ある如くに、宇宙全體が大我であります。絶對無限の大我、即ち我々の大きな親であります。それが吾々の信仰するところの如來の本體である。しますると我々は子供なので其の故は形の方から申せば我々の身體は其原料はどこから仰ぎしやと云へば、宇宙にある所の元素が集つて此身體を構成して居るのである。故に宇宙の一分子である。即ち宇宙は大我であります。大我の如來は小我の衆生と親密なる關係によつて宗教は成り立つものであります。大我と小我との調和即ち親の心と子の心が合一する所なのである。此の身體だけのものならば小さなもので地球てふ一惑星に寄生せる微蟲に過ぎざる實に果敢なき生物である。然れども進んで吾々の深奥の精神を開發する時は絶對の大靈と吾々の心靈とが合一しますと實に廣大無邊際の大靈物である。即ち親と子との心が一つになり永遠不滅の生命なるを自覺することが出来る。然らばいかにして之が可能になるかとなれば即ち吾人の主義では念佛三昧の法を以て其の實が得らるゝのです。

念佛三昧とは親の佛心と子なる衆生心との合一する心的状態なのである。さてそれは如何にして得られまじやうか。即ち信仰であり、愛に又注意すべきことは宇宙全體が如來の本體ではあるけれども其の中心がある。其の中心が即ち我々が本體と仰

五

ぐのである。人間も身體全體に精神が充滿すれども大膽に中心がある。丁度國に天皇陛下が在すごとく、我々に中心ある如く、宇宙全體が親であります。如來の恩寵、親が子を愛する如く力を此方に與へてくれます。それを受けるが信仰であります。それを華嚴經に斯う云ふ風に譬へてある。日光あり眼目ありて能く物を見ゆる如く、人に信仰あり如來の光明と人の信仰との感應によつて宗教心は成り立つのである。如來の光明は宇宙全體に遍く照りわたれる大靈光である。而して如來大靈光は人に信仰てふ眼なければ感ずること出來ぬ。丁度盲人の太陽の光りの感じの如く、如來の眞理の光は本來宇宙に満ちて居るけれども分りませぬ。又水月感應の譬の如く天に皎潔なる月は照せども洋々たる水のなき所には感應せぬ。若し人に清淨なる信水充つる時は如來の靈月必ず感じらるゝ。本來如來即ち神は實在するとか又實在せぬとかの問題でない。自分が感じ得べき信心が有るか無いかのことに歸するのである。自分の信水淨らざる時は感じらるゝわけはない。

元來宗教と云ふものは大きな親の心が子供心に感應して而して親の圓滿なる靈徳の心に同化せらるゝものである。

## 親の目的

如來と衆生との關係に能生と所生と能歸と所歸と云ふことがあります。

釋尊が一ら衆生教化に盡されたのは大なる親の聖旨に叫ぶべく我等を佛に成さんが爲である。然るに今八十年間衣食を要しても肝心の目的なる靈性を啓發しなければ落第の不幸を見なければならぬ。即ち地獄畜生等の闇黒の中に陥つてしまふのである。それで目的の方から申しますと、宇宙は大なる親で八十年間辨當を呉れますのは人間の親が子供に辨當を持たして先生に知能を啓發して貰つて立派な人になると同じことで釋迦と云ふ大きな先生に就いて啓發して貰つて行けば永遠に光明の生活を得て人生を

七

完うすることが出来るのでございます。標準と云ふのは持つてゐる靈性を開發して行くのであつて宇宙の親から申しますれば宇宙の目的に従つて行くのである。宇宙の大きな絶大の備を以て吾々を活かして呉れる天地の廣大なる設備がなければ吾々は活きて居られぬと同じことで、宗教から云へば親であります。大きな備を以て活かして呉れるので親の心に叶ふべき處の佛にする爲であります。それに従つて行けば釋迦同體の佛になることが出来ますのでございます。

### 光明生活に入る階位

難思光 喚起位 心靈の嘩嘩

無稱光 開發位 言語道斷、冷暖自知

超日月光 體現位 光明生活、聖意實現

人間が斯く生活してゐる目的に就いては、釋尊の教によりますれば、大なる目的を發見して其の眞理の標準に則り敢て突進しなければならぬ。宇宙の大法から現れたる如來の勢力に引き上げられ永遠の光明に進み行くのである。彌陀の本願に歸趣する行程がある。宇宙の目的が即ち自己の目的となる。其眞理の目的に隨つて眞善の極なる清淨國に進趣す。即ち極來又神の國。宇宙の勢力に引き上げられて行くのが攝取せられるのであります。或は彌陀の本願に歸すると云ひ、或は天の父の許に歸ると云ふ基督の教も同じことであります。何れにしても斯う云ふ眞理でありますけれども之を知らずに居るのが迷の中に居る生活であります。それを知つて従つて行くのが光明の生活であります。永遠の終極に達するのが極樂、天國、成佛とも申します。それに就いて、光明獲得したる心と、いまだ得ざる天然の状態とは如何なる異點あるか、又光明獲得したる心相はいかに變化するやと云はゞ、人の精神は三に分類することが出来る。天然の人の感覺は穢れ汚い。之が清淨光を被つて清淨皎潔に美化する。感情に美化すると心廣く體肝かに歡喜と妙樂に充さるのである。凡夫は迷ひである。其中

九

に悟の光を與へてくれるのが智慧光であります。人間の意志は慾の奴隷であります。どうしても悪いことを覺へる。それを信仰の力に救はれて不斷其の力に頼つて善い働きが出来るのが不斷光であります。すると光明生活と云ふのはそれを得ますと始から終りまで毫も變らず丁度電氣があつて附けますれば十燭其まゝかと云へばさうでありませぬ。

喚起位、開發位、體現位とあります。

### 信

ミオヤより一切の子らを愛して恵み玉ふを恩寵と云ひ、子らがミオヤの恩寵をマウケにするを信仰と云ふ。親子の關係を親密に爲るの謂である。子らがミオヤの恩寵を仰ぐに、全幅を獻げて歸命信賴するを信仰とは云ふけれども、若し信仰を知力と感情と意志との三面に分ける時は、知力的にミオヤとの關係を領解し承認し、感情には、親子の因縁を親密にし、全くミオヤを愛慕する情にて愛と云ひ、意志には、我は子なれば、ミオヤの全き如くに靈格を完成せんと欲望と爲る。今は三分類したる知力的の信仰を信として、初めに、道を求め道に入るには領解承認等の信を要す。

佛法の大海には信を能入とし、信なくば道を求めて、ミオヤの恩寵を我有とすることが得られぬ。また信は道源功德の母とて、道を求めて道を得るは信心が本である。信じて道を得れば、一切の功德も之より生ず。然らば如何に信じ、また何をか信す。二種の信。聖善導は二種の信を明す。一に機を信す。二に法を信す。

機を信すとは、自己の機能、己が機を自覺すること。機は器なり。己は宗教的完全なる資格が生れつき具備して居るやを反省し、現在我の罪惡を自覺する。曰く、決定して深く信す、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來常に没し常に流轉して出離の縁あること無し、と。

己の機分の云何を信認するに、元來人はミオヤの子にして、また人間の子である。

一一

此の兩性の中に靈性は、法を得て、初めて開發し、顯動す。天然としては人間性即ち動物的本能から進みたる人間性なれば、唯天然素朴なる本能ばかりでなく、還つて意識的に惡のみ發達して居る。ミオヤより稟けたる靈性は、永く閉ぢ籠められて、肉我の動物性が跋扈して主人の如く全心を横領して居る。恰も幼君が狡猾暴惡なる奸臣の爲めに横領されて居る様なものである。靈性は大きなミオヤの靈光に接せざれば顯動すること能はず。暴惡なる臣、肉我は數多の眷屬を従へ常に我儘勝手を働き、天意のあることを覺せず、毫も慚恥の色なく、自ら偉がりの顔をして居るも、實は自ら高尚ならざる肉の奴隸たるを覺らむ。

人の罪惡の根本は無明である。人間がミオヤよりの使命を自覺せず、生の眞義を悟らざるのに基因する。人がミオヤの子たる靈性、之れ天の使命にして一身の君たり、一切の動物的心意は、之に服従して各々職分を竭すべきなりとの、この眞理を未だ覺知せざるを無明と云ふ。

劣等動物より高等に進み、例へば國の建國に先き立ちて劣等種族が群居して野蠻なる國土を作りてありし處へ、天孫種が顯はれて、前の蠻族を降伏せし如く、天孫種の降臨せざる時は、蠻族の酋長が蠻勇を奮つて而も自ら偉なりとする如く、吾人の天孫種なる靈性己に顯動するに至れば、蠻種も竟に開化せられて、良臣民と化す如く、之を煩惱即菩提と云ふて居る。

是機法二信を要する所以である。現在我の罪惡を認めて靈我が顯動するに至るには必ず法に依らざるを得ぬ。法とはミオヤが子らを囚獄より救ひ出す契機である。いかに永らく惡魔に囚執れて罪惡に陥入りしにもせよ、本來ミ子なれば親子契合すべき理なくてはならぬ。是ミオヤが子らに對する聖意である。之を本願力と云ふ。

現在我の罪惡を是認するに、罪惡に種子と現行とあり。什麼にも吾人は生れ乍ら罪惡である。是れ宗教の必要を感ずる第一にして、衆生は根本的罪惡の者なのである。若し人は本來善正にして罪惡

なかりせば、人々は生れ乍ら是れ佛である。何ぞ夫れ宗教の要あらん。然るに人は正善の性は伏して、之を開發せざれば顯はれず、罪惡は改善せざればならぬ性能を有てゐる。是宗教の要ある所以である。

### 波 羅 密

宇宙大道法によつて自己の靈能を發展する時は宇宙全體と我とが大調和する。大道と調和し得れば一切人類と内心に調和が得らる。親密に調和し得ざる人は唯肉體形質の意志に由るなり。靈的意志は大靈に合致したる源泉より流れ出づ。

人は其の靈性を具有するも之を發揮すること、鑽石より純金を練り出す如く、人の氣質の中より靈性を發揮する、之が爲には碎勵せなければならぬ。即ち尅己精進忍辱等は悉く靈性を發揮し形氣の煩惱感情意志を美化するにあり。性を遂ぐれば必ず調和す。

天體の星雲混沌の状態より宇宙大道法に則り自己の道により一心努力の結果圓滿に其の性を遂げて、現在天體は太陽が中心となり諸の惑星が之に附隨して天地に位し、各自己の性を分ちて守り其の軌を逸せずして運行し無限の勢力太陽より常恒に光六合を照し調和し運轉す。

家庭も又然り、其の性を遂げたる家庭は能く調和し運轉し家庭整ひ相互相親み正義其の分を守る。

其の性を遂げたる國家は帝王が太陽の如く威神仁慈の光仁慈の熱能く國民を撫育教化し上下調和す。

一切の終局は大調和に歸せしむ。之を爲すには同體大悲を以つて相愛親し義以て自

ら守り義務を重んじて自己の靈性を發揮し六波羅密を以てす。

六波羅密とは到彼岸、宇宙終局の圓滿なる大道の即ち神國に到るにあり。宇宙大道法は一切の衆生をして無上佛果に到らしむるにあり。之に到るの道は大菩提となす。

其の大道を實行し向上進趣するの過程を波羅密と云ふ。即ち心靈界の大帝都に達する道中である。其道の行程を波羅密と云ふ。六度、十波羅密等あり。又廣くは無量の波羅密あり。總べて其の道業に於て完全に成熟したるに名づく。般若の實智若くは權智、又は忍辱精進克己の如く何れの道業に於ても至誠熱誠破勵精修する時は必ず其の性を遂行す。喩へば礪石より精金を練出する如し。

要する處自己の性を盡し本能より總ての智徳圓滿なる靈格に到達すべき伏能は具出して居る。然れども之が性を遂げる迄精練せねばならぬ。靈性は心靈の分なれば靈性が指導する處の行爲は必ず宇宙大道と合せば即ち是れ無上菩提である。

### 清淨光

如來の清淨光を人の感覺に受けて靈化するに五種あり。我々の精神状態が一心に如來の光明を受けますと、肉の眼も、耳も、鼻も、舌も、身も何となく變つて清淨になります。夫れがもつと進みますると、天眼、天耳、天舌、天身清淨と能く申します。千里眼、遠方の物が分ると云ひますが夫が天眼であります。向進むと法眼、法耳、法鼻、法舌、法身清淨と申します。肉眼と天眼とは形の世界を見るので、生理的眼で見るのであります。夫が肉眼であります。

千里眼見た様に精神に通じて世界のものが見える、聞えると云ふのが、天眼天耳と申します。夫れは清淨になるからであります。もつと進んで如來の世界、極樂とか云ふのは此世界ではありませぬ。自己が此處に在つても佛の世界、神の世界になるので人には見えませぬが、清淨になると見えます。何とも云はれぬ音樂の聲が聞える。

慧眼と云ふのは、天地悉く何にもなく宇宙と（）合して仕舞ふ。夫から佛眼となるのであります。夫が出来ますと釋迦さんと同じ様な状態になるのであります。皆さんが始終心を其方に用ゐて行きますと理性だけでも出来て來ます。其中に樂が感じられます。如來の境涯と自分の境涯とが見附かつて來ます。心の日暮しが高等になつて來ます。何うしても、人間は賤しくなるものでありますが開發して行きますと理性も高等になつて來ます。此の感覺が美化して來ます。爾うなると何ものでも清らかに感ぜられます。青い眼鏡で見ますと何を見ても青く見えますやうに自分の心が賤しいと何を見ても汚なく見えます。夫が清淨化して來ると清らかに感ぜられる様になります。

人間は人間だけを見てゐるので、自分の心の一部でも心が清淨になれば何物でも清らかに見えて來ます。人間には人間の事が分りませぬ。自分の心が清淨化して來ますと何となく美しく感じ樂しく清らかに感じられます。

### (天然を超へて)

衆生の有限の理の中に於て良知は無限の眞理を發見せんと希望す。然るに我執は何ぞ希望する處の無量光に歸せざる。

本體の屬性は無邊眞理を豊備するならん。如何せん、この無邊の眞理に悟入することを得べけん。良知は之を渴仰しながら、無邊光に歸依せざるは自ら其良知に撞着するに非ずや。人はこの機制の束縛に繋れたることを厭念ひ、いかゞせばこの束縛を離脱して自在を得べきやと意志は欲望しながら、無碍光に依頼することを欲せざるは自己の欲望に衝突するに非ずや。

人は理を知る意識を有する生物にして精神を用いば、本何れより生じ何に歸するが理なるかを知らん、この至理の終局目的を目的とせずば、此の眞理に生じ眞理に歸するは其精神生活の目的には實に夢といはん幻といはん。名づくべからざる兒的人物

といはんか。

物に天然の物と超天然物とあり。

頑石の如きは天然の其面目にて足れりと爲す。眞金は鑛石より、珠玉は璞より碎別琢磨して始て其眞價を顯す。動物も禽獸は天然本能にして可なるべくも、人は學行修練して天然を超て眞價を顯す。人は最深奥妙の機能を發達せんと欲せば惡素質を焚燒し盡して始て至眞の靈德顯はすべし。何ぞ炎王光に托せざる。

### 時代の燈明

世は少年が青年に、青年が壯年となる如く世は遷流變化して止まず。潮流に立ちて世を清流に指導するが宗教家の使命である。若し新陳代謝昨日の是必ずしも今日の是に非ざる思潮に立つて、混濁せる潮流に巻き込まれて何れに向つて歸趣すべきかを知らず。

宗教家は百千年の將來を豫言して新しき光明に燦め世を指導すべきなり。世は常に遷流して停止せず。世の劫の中に在つて一切の歸趣する處の宗教家は世の燈明臺となつて世を濟し衆生の歸する所の標準たらざるべからず。今日は燈明臺員が熟睡して燈の消えんとせるを覺らず。願くば吾同胞よ、世の燈明と爲つて時代の渡航の彼岸を明さん。世は常に遷流す。若し沈滞する時は必ず腐敗の憂あり。世を救ふ宗教常に新しく新に又新ならざれば時劫を救ふ能なきなり。願くば同胞よ、如來の聖意を承けて世を清かにせん。

見濁。佛を世眼と名づくるは、喩へば此身體中に眼目ならんか此全體は闇黒である。若し世界に佛ながらんが人生闇黒である。宗教は一切人生の眼である。人生觀未來觀宇宙觀宗教觀等すべて人類の精神を照す光明は宗教である。若し人間が此世の人類が各自然に正知見の眼あつて自己を覺して自然的に大悟するものならば宗教の

要なきなり。宇宙の自然に明きものならば日光の要なし。人生は本來闇黒である。自己を覺すること能はず。云何に行爲するの眞理なきを覺明せぬ。故に宗教を以て世眼と爲りて人類を如實に指導すべきの任務あり。

佛陀出世の前九十五の外道の螢火人生を照さんとして還つて人を惑せり。釋迦正覺の旭宇出て、始めて世界人類心靈の光明となる。宗祖の世や南都北嶺の大衆も當時心靈界に光明を興ふるものなし。唯佛敎を文字言説の玩具として、人世の眼として永遠の光明に導く眞理たるを覺らず。宗祖世に出て、我國民に永遠の光明を興ふ。永遠の光明に導くは宗教家の使命なり。或俗人が曰く我等凡愚未來の地獄天堂の存在を未だ認むる能はず。然れども現今の佛敎家の實行より推す時未來の存在することを證明す。若し全く在るならば宗教家自身の素行修らなければならぬ。宗教家の實行上から未來の無きことを證せるとく、宗教家が眼目ならば全體を擧げて深坑に陥る。實に謹まざるべからず。

煩惱濁。人類に脱却せねばならぬ弱點を有す。故に宗教の要あり。人類又動物である。高等に進化したる動物である。故に動物欲を持つてゐる。精神の正善の方も發達したると共に罪惡の方も發達して居る。若し自然に捨て置くも自ら弱點を脱却して菩提と爲り得るものなれば宗教の要なきなり。然らば肉慾我慾は何人も有つて居る。之を脱却し靈化する時は煩惱即菩提で邪惡も轉じて正善と化す。是佛敎の要ある所以である。

衆生濁。相互の我と彼と向つて因縁して惡道に誘致する墮落し惡を増長せしむる勢力存在する故に宗教の要あり。内に煩惱あり外に誘惑機關あり。解脱淨化するの佛法あるも、迷ひし世は三惡四趣と化し去る。社會生存競争は益々各自内より煩惱を増長せしむ。腐敗せる社會は種々の雜毒微菌發生し、恰も肺病や花柳病の微菌の病毒は交際繁多の處に傳染する如く、精神の毒菌も衆生濁の因縁混雜せる處に傳染す。常に宗教の防腐殺菌を以て社會を救済するに非ざれば心靈上健全なる社會をなすこと

能はず。田舎の空氣流通よき處に流行病少く都會に流行病蔓延も迅速なる故に衛生も随つて嚴重なる如く世は人類益増殖するに隨ひ交通繁く益惡毒流行が激しき故に宗教は益奮發せねばならぬ。

大經五惡段は能く濁惡の社會に立ちて奮闘せよと獎勵せられ玉へり。

一切人民蠕動の類衆惡を爲さんと欲す、皆然らざるなし。強者伏弱轉相剋賊殘害殺戮迭相吞噬善を修すを知らずと。

### 生命

「心生滅」の方を又二面に見て人の生命を生物學又は生理學的に生命を研究する其の方から云はゞ生命の原理を物質的機械的化學的に説明し、夫らの生命は單に炭素等の化學的作用より發生す。炭素は物質の最も精妙なるもの大に變化に富み柔にして彈力を有し、酸素、水素、窒素と共に精の極とも云ふべき化合物を作る。之を元形質と云ふ。此元形質が生命の源であると説來りしが、尙又更に其元理を究めて次の如くに生命の源を説く、曰はく、

自然界には物質的常恒流連の精氣あり、個々獨立す、之を電子とす。此に陰と陽との二氣あり。兩者は反對であつて互に相扶け合ふ。此兩電子が結合して原子と爲る。其の一の陽電子が因となり數多の陰電子が相縁つて原子と成る。此原子を單位とする物質を元素となし、水素酸素等の一切の元素なので、原子の結合に安定と不安定とあり。ラヂウムの如きは外圍を繞る陰電子を放出す之を放射と云ふ。元素の差別は原子を組織する電子の數に依るのみ。次に原子が結合して安定するものを分子とす。是の分子を單位とする物質は化合物で分子が炭素化合物の原形質となる。又分子が結晶して細胞と爲る。細胞は膠狀の結晶を爲す。此が永恒に化合し同化と分解とが行はる。是即ち自發的運動と消化作用とである。此細胞が更に結合して一體と爲り初めて生物と成るのである。生物には動物と植物との二種あり。原始生物より進化した高等動物乃至

人類と爲る。故に人類の生命の宿れる炭、酸、水、窒の化合の原形質も又數多の分子が結合したので、分子を結合したる其元は原子である。其原子は精氣の電子、其原形質分子は炭原子四五〇個、窒素一六六、水素七二〇、酸一四〇、硫黃六千五百の原子より成ると。

物質の精氣電子が結合し原子となり、原子が更に結合して分子となり、分子合して細胞と爲り、細胞が結合したるものが高等動物である。

原形質は不安定なる化合物の結晶體であるから、不斷に代謝作用が行はる。細胞は原形質の分解によりて種々の働きを作す。自發的運動と、攝食運動と消化作用、生殖作用、融合作用等を爲す。之を生活と爲す。之が生活の過程を生命と云ふ。恁の如く人の生命なるものは實に微妙不思議の自動機械に外ならないと。

或る學者は身體内に發する處の器械的熱的電氣的變化は實は分子の反應から起るの生物の官能に關して動物の消化、同化、呼吸等の作用は化學的である。物理作用は分子相互の働きから起す。生物の身體内に器械的に統制力があつて働き、又は生成したり、又生活の回復するのは化學的作用から行はるゝのであると。又生命は酸酵素を中心とし構成せる一種の芽胞が生命を創造し發達分化の基礎となり眼耳等のすべての官能を統制すとなし生物を生ずる種の核即ち生命の體ある芽を發する胞此芽胞が個體を決定するので觸媒的物質が化學的に細胞分裂に際し核が分れて二個細胞の特性が卵から身體組織に移りて核細胞中に種々雜多の特性が嵌込細工式に含有する細胞が分裂の位に發達し、或は四肢五管の特性に抽出されて身體の一定の部分となる。(以下中絶)

生物生命の元素なる元形質は親の元形質から子の元形質に分れ細胞は前の細胞から來たので元始の生物生命は極少の元形質にて水中に生息せる無核蟲の類にある。此極小の蟲は一個が二個と分れ又二個に分殖して何を親とし子と云ふことも出來ぬ。かく

展轉して千萬無量に分れて生存す。此の極小の生物細胞が結合して高等動物の形體を組織する一切の動物乃至人間までも此の細胞の聚合したる團體に外でない。若し此細胞を元糧として人間の型式に容るれば人の形となり又禽獸より草木に至るまでも細胞の和合上に様々の形式に形成したるに過ぎぬ。此細胞團體が始の單細胞から漸次に進化した腸腔生物となれば分業を營み食物を取らば又消化を營むようになり、即ち水母の類にて次に蛭とも又蛇となり數多の階級を経て高等動物の猴とも尙一層に進みて人類に至る。要するところ同一細胞の假和合上に種々無量の種類と形式とに組織せられたるに過ぎぬ。佛教に謂ふ四大假和合を假りに人または衆生と名づけたのである。

有核生物となれば核は遺傳の決定素にて芽胞を構造したりまた成長させ又は細胞活動の連鎖をなさせる故に核は生命の住所である。核の外は唯生命を扶助する外包にて保護の機關に過ぎぬ。生命は核に有るので、故に分殖するは核が二個と分るゝわけである。然る時は兩方共に外包が出来るのである。然して雌雄兩性と別るゝように成れば核もまた多數となりて、各分業的に掌る所が定まる。生殖を掌るは雌と雄との兩方の核を合して始めて一個の生命と爲る。それが即ち父母の間に成立したる子である。核に親の遺傳決定素を有つてゐる。而して其子に傳ふ。さうすると子も又親と同じく外包に保護せられて核の生命を保存す。生命の座所なる核は肉體は離れても子孫に分れて同一の生命が存続する。親に宿れる生命が元形質の核を以て子となり此の核は長久の生命にて外包は幾億萬に替れども核の生命は永久に存続し核は有目的の如くに生物が進化す。原始生物の元形質に伏藏する性能は代々に進化の務を以て居るようになり、親の徳性は核中に含藏して之を子に遺傳し核に有るだけに外包の身體は構成せらるゝ。人類に至りては核細胞中に種々難多の嵌め込み式に含藏して精子卵子の合體が胎兒と成り種子の嵌め込みから芽發し始め原始生物の蟲的の形からまた芽が出て莖から枝と云ふやうに細胞の分裂の位が階級的に各々特殊的に抽出されて五體五官等の一定の部分となり親の生命及外包が子となり其本は一體の分身にして此分身

作用からして世界中に彌蔓して幾億萬となつたのである。

物理學者は物品精妙の主體の何なるを考へぬ。幼より老に至るまで統一の主體は何なりや。生命統一の主體は何なりや。

地上に發生したる生物生命に於ても一切生物界を通じて同一の起原より出たと云ふも敢て杆格はしない。我々の生命は世界的生命の一部にて人類の祖先より尙遡りて生物原始の生命にまで連絡してゐる。原始生物は極めて單純なる單細胞に生命の宿つて其を保護する所の外包なる細胞身體がある。而して外包なる身體は保護し且つ働かぬには必要なれども生命は元形質に在つて之を子々孫々に連鎖し嗣續して死なぬ部分がある。即ち生殖細胞である。父母の細胞が合體して新生命を宿す根本細胞と爲る。それが即ち動物及び人間生命の根本である。人の生殖細胞に宿れる生命が横には廣く枝から條を爲して彌蔓し豎には千萬代に嗣續して極りなし。由つて觀れば生命の宿る細胞は一體から無限に分身して居るが然も其一々の生命が現代の人類的精神の如きに至つては各自の精神には非常な複雑な相と働きとを有つてゐる。故に生命の身體なる細胞を唯物質的にのみ見たならば解する能はず。

精神生命に就きては東西に亘り數千年に亘りて唯物主義、唯心主義とまた物心併行主義との三説は依然として行はれてゐる。人の意識が進めば進むに隨つて、其學說も益々精密に深遠に入る。然れども唯物主義を以て精神主義を全滅することが出來ず唯心主義を以て唯物論者の根を斷つことは不可能である。(以下中絶)

然れども一々の生命は宇宙の絶對的生命の一部を受けたる生命である故に個々に各自宇宙的生命と不可離の關係を成してゐる。故に此の生命の本體は宇宙其物である。



故に吾人の生命は絶對生命と連絡を斷つことは出来ぬ。

三二

一體分身である生命が進化して人類生命の如き外包なる細胞組織も非常な複雑の狀態となつた。世界上一切の生命は本一體の分身にて各自は一分を我が生命として居る、若し之を大にせば宇宙の一大生命の一部が一切個々の生命である。一切の個々生命を合して宇宙の大生命である。吾人の身體生命が無数の細胞の聚合團體なる如く宇宙は一切衆生の聚合團體である。

又佛教では衆生心に十界互具と云ふ。本来一切生物は、通じて同一の心性である。人類と劣等生物とは、全く分界を異にして居れども、其生命の體なる心性は同一である。生物進化論では、生物生命の方より同一の進化程度を、外的生活に基づき、佛教は内的生命の心識の行爲進化の方面より界を分つ。身心不一不異なれば、佛教又生物進化の理を説くも敢て非難すべからず。

生物の生命は、全く自然に一種の力、生命となるべき力あり之を生氣と云ふ。生氣が一切生物の元素であると云ふ學者も有るけれども、又一方には併行論と云ふ精神と身體とは併行して居る、肉體に變化あれば必ず精神にも其變化を及ぼす故に、身と心とは實は同體の兩面と云ふ事も出来る併行とも云へる。

生物生命の中に十界互具、即ち極少の生物にも諸佛賢聖とまで進化し得らるゝ伏能を藏して居る。

### 後篇

## 發願の果

譬へば數へ盡されぬ	有らゆる諸佛の國々に
光明徧ねく照らして	近らぬ隅もなきまでに
斯くは志勇精進し	威神量り難かるに
我作佛せる國ばかり	最勝第一ならしめん
無量の衆寶奇妙にて	道場殊に超絶し
無爲泥洹の國きよく	又たくらぶる處なけん
我世の一切の衆生が	生死の海に沈む身を
恕ひやられて哀愍さを	争かでか度は有ぬべき
十方より來生せる人々の	心は清らに安らけく
我國にだに到りなば	快樂安穩ならしめん
幸はくば我がみ佛よ	我真證を證明しませ
衆生救度の願望を	果さん爲に力精まなん
十方世尊無礙の智よ	我心行を知らしめせ
假令此身を諸の	猛き獄火の中に入り
有ゆる苦毒を受くるとも	衆生に代らん我行は
彌々勇猛精進し	忍びてつひに悔いぬなり

三三

三四

四誓の偈

我超世の願を建つ 必ず無上道を得ん  
 斯の願若しも満さずば 誓ひて正覺の身とならし  
 我は無量劫の中 大なる施主の身と爲りて  
 一切の貧苦を濟はずば 誓つて正覺の身とならし  
 我佛道を得る時は 名聲徧なく超らなん  
 若しも聞えぬ處あらば 誓ひて正覺の身とならし  
 離欲と正念淨慧との 一切の梵行修めつつ  
 無上道を求めては 凡ての天人師と爲らん  
 神力大光を演ては 普ねく無際の上を照らし  
 三垢の冥を消除し 衆の厄難を濟はん  
 彼の智慧の眼を開きては 此の昏盲の闇を消し  
 衆の惡道を閉しては 善趣の門に通達し  
 功詐成満いたしては 威を十方に曜かし  
 日月の光も戢まりて 天の光も隠れなん  
 衆てに法藏開きては 功德の寶を施さん  
 常に大衆の中にして 法を説きて獅子吼せん  
 一切の佛に奉事しては 衆の徳本具足りぬ  
 願慧も圓かに成満し 我三界の雄とならん  
 佛の無碍の智の如く 通じて照さぬ處もなく  
 願くば我智慧の力 最勝尊に等しくし  
 斯願にして尅果せば 大千應さに感動し  
 虚空にみてる天人よ 珍なる華を雨せかし

三六

如來壽量品 (法華經壽量品)

久遠實成 我は佛と成りてより  
 無量百千萬億載 常恒教化  
 常に妙なる法を説き 佛の道に入らしめて  
 方便涅槃 衆生を度せんが爲にこそ  
 實には滅度せずして 此に住して説法す  
 神通不見 我常に世に住すれど  
 衆生顛倒するからに 諸の神通力を以て  
 追慕供養 衆我滅度を見てより 近くはあれど見ざらしむ  
 信仰見佛 盡く皆戀ひ慕ひ 廣く舍利を供養爲し  
 衆生既に信伏し 渴仰の心生し  
 一心佛を見ま欲しく 質直に意柔順に  
 靈山語現 自ら身命を惜まねば  
 時に我衆僧等と 俱に靈鷲の山に出づ  
 我等衆生に語るなり 常に此に在り滅せずと  
 權現滅不 唯方便力を以て 滅と不滅と現すれ

三八

三七

三九

餘國說法

餘國にありて衆生等が  
我また彼等の中にして

衆生不聞

汝等此を聞かずして

非滅現滅

我諸の衆を見れば

爲に此身を現はさず

戀慕說法

ひとへに戀慕するに因り

神通の力是の如し

常在靈鷲山

常に靈鷲山および

衆生の時劫は盡果てて

我此土は安穩に

園林もろもろの堂閣は

寶の樹に華果多く

諸天は天の鼓うち

曼陀羅の花を雨しては

不見因緣

我觀る淨土は毀れじを

憂怖と諸の苦惱

崇敬信樂する者は

無上の法を説きぬべし

但我滅度すと謂ふ

苦海に没在する故に

渴仰の心を生ぜしむ

乃ち出でて說法す

阿僧祇劫に於て

所餘の諸の住處にて

大火に焼かると見る時も

天人常に充滿せり

種々の寶に莊嚴れるも

衆生の遊樂する處

衆の伎樂を作して

佛と大衆に散すなり

衆は燒盡さるるを見む

是の如くに充滿す

四〇

憚る諸罪の衆生等

阿僧祇劫を過れども

有願見佛

有ゆる功德を修めては

乃ち我身此に在り

三種機類

或時は此衆の爲に

久しく佛を見ん者に

光壽無量

我智の力是の如と

壽命無數劫なるは

斷疑

汝等智ある者は此に

常に斷じて盡せかし

喩

喩へば醫のよく方便し

實には在れど死すと云も

同喩衆生

我また世の父として

凡夫顛倒せるために

常見憍恣

常に我を見るを以て

放逸に五欲に著しては

惡業の因緣により

三寶の名だに聞かぬなり

柔和質直なる者は

說法するを見ゆるなり

佛壽は無量なりと説き

佛に遇ふこと難しとす

慧光照すこと無量

久しく修行の得る處

疑ひ生ずること勿れ

佛語は實に虚しからず

狂子を治せんが爲にとて

虚妄を説にはあらぬ如と

諸々の苦患を救ふ者

實には在れども滅すと云

憍恣の心を生じなん

惡道の中に墮しめん

四二

四一

四三

我常に衆生等か  
度すべき所に随ふて  
慈父 慈子

每自是の念を作す  
無上道に入り  
何を以てか衆生等に  
速に佛身得せしめん

世尊靈鷲の大會にて

即ち法報應の身は

即大日彌陀釋迦の

三身各別は方便教

( れば吾牟尼伽耶場

方便にして實には久遠

實には如來は絶對の

靈體にして久遠より

不斷に實には因果を超ゆれど因果の中に迷ふ衆生の爲

常恒因果満にて

大海に寶は充満れど

四 ( 衆生悉く

佛甚深因縁海

清淨法身の中

譬へば明淨なる日

如來淨智の日光

譬ば龍の雲を興し

行道不行道を知り

種々の法を説

何を以てか衆生等に  
速に佛身得せしめん

如來秘密藏を開き

一體三身三身一と

三身即ち一なるを

三身無別を眞實教

初めて菩提を得たりとは

時空を超たる永恒の

實成にして永劫に淨業

常に因 ( 佛業を爲す

清淨濁りなき時は

形像 中に映現す

功徳の寶無盡にて

像とて現せぬ物なし

世間の闇を照す如く

三世の闇を除くなり

普く雨らして霑すに

四四

身心雨は降すれど

如來法雨もまた然り

能く一切を開悟して

如來清淨妙法身

諸の世間に超出し

無所依にませど無不住

夢の所見の如く

色と無色とに非ず

有と無有とに非ず

大海摩尼無量色

如來色と非色に非ざるも

虛空眞如と實際

斯る眞實法ばかり

剎塵心意は數ふべく

虛空を量

若し斯功徳海を聞

廣く無上道を得て

除熱清涼爲す如く

佛の身心より出でず

三毒の火を除滅せしむ

三界に儉匹ものもなし

有無を離れて超絶す

不去にて徧く至るなり

また空中の畫の如し

相と無相とに非ず

其性虛空の如くなり

佛身差別もまたしかり

隨應而現所住なし

涅槃法性寂滅等

如來を顯示すべし

大海水のみ盡すとも

佛の功徳は説盡きじ

歡喜信解を生じなば

諸の如來と等しけれ

五熱を以て身を炙り

すべての異學を降伏す

算術醫法の術に通じ

種々の相法に了達し

三昧及び解脱等

方便佛道に住せしむ

四六

四五

四七

珍妙衣服美冠等  
 四兵前後に圍繞して  
 或は法官と爲り  
 與奪共に明察し  
 ( ) 訟斷獄官と爲り  
 或は大臣弼輔  
 頓語衆生を攝めては  
 或は護世の四天王  
 其衆會に爲に説法し  
 或は帝釋天となり  
 諸天の衆に圍まれて  
 或は夜摩兜率天  
 摩尼寶殿に居處して  
 或は梵天衆會の中  
 歡喜せしめて去ぬれど  
 譬は工の幻師  
 佛衆生を化せん爲  
 月の虚空に遊ぶ如と  
 一切の河池に影現し  
 如來智月世に出て  
 菩薩心水に影現し  
 種々莊嚴の身と現じ  
 刹利小王を威伏せし  
 民事刑法等を聽き  
 一切を欣伏せしむなり  
 訴訟刑治の法を解し  
 能く正法を用て治政  
 民を安に在せしむ  
 八部鬼神所に詣て  
 一切に歡喜をせしむ  
 善法堂に安住し  
 ために妙法を演現す  
 化樂自在魔王所  
 説法調伏せし  
 四無量及び諸禪道  
 往來の相知るべし  
 能く種々の事を現す如と  
 種々の身を示現  
 觀る者増減すと謂る  
 星宿の光を奪ふなり  
 増減ありと示せども  
 二乗の星は映蔽す

昭和五年九月廿八日 印刷  
 昭和五年九月三十日 發行  
 誌代郵稅共 年貳圓  
 編輯兼 山崎 辨成  
 發行人 牛込區早稻田鶴卷町四〇三  
 印刷人 小林 七太郎  
 牛込區早稻田鶴卷町四〇三  
 印刷所 靜文社印刷所  
 東京市小石川區水道端二丁目四十四番地  
 ミオヤのひかり社  
 振替口座東京六八五一番